

Appleby at Allington

1968

by Michael Innes

目次

アリントン邸の怪事件

5

訳者あとがき

217

主要人物

- オーウエン・アrinton アrinton・パークの当主
マーティン アrintonの甥
フェイス アrintonの姪
ジョージ・バーフォード フェイスの夫
サンドラ バーフォード夫妻の娘
ステファニー 同右
チャリテイ(キャリー) アrintonの姪
アイヴァン・レスブリッジ チャリテイの夫
ユージーン レスブリッジ夫妻の息子。一卵性双生児
ディグビー 同右
ホープ アrintonの姪
- *
トリスラム・トラヴィス 若き歴史学徒
レオフランク・ノックダウン リンガー村在住の若者
エンツォ アrintonの使用人。イタリア人
スクレープ 教区牧師
- *
ウィルフレッド・オズボーン アプルビー夫妻の友人。アrinton・パークの前所有者
- *
トミー・プライド 地元の警察本部長
サー・ジョン・アプルビー 元スコットランドヤード
元ロンドン警視庁警視総監
ジュデイス アプルビーの妻

「忙しい生活のなかで、ささやかな安息のひとつを送るのはよい気分転換になります」オーウェン・アリントンが言った。「気の合う方と差し向かいで、というかたちなら、なお嬉しい」

アリントンは端正な顔立ちをした五〇代後半の男だった。心もち古風な雰囲気は漂わせんと自身を陶冶とうや——と、形容する以外ない——しており、格式と礼儀を重んじた言葉遣いを心がけているようだった。しかし、書齋に備えられた見事な暖炉の向かいに腰かけているサー・ジョン・アプルビーは、接待役のお世辞にはとくに反応するまでもなからうと思った。いや、むしろあとから振り返れば結果的に反応していなかったというべきか。アリントンは疲れているようにも見えた。この穏やかな一夜を独りで過ごすことに決めなかったのを、あるいは悔いているのか。だがともあれアプルビーを食事アプルビーに招いた——独り暮らしの屋敷へ。アリントンは未婚者だった。

アプルビーの妻ジュデイスは明日ロンドンから戻る予定になっている。

申し分ない食事会だった。ともかくそういう名目の場としては。オーウェン・アリントンは、アプルビーには必ずしも気心の知れた相手ではないが、実にもてなし上手な人物だった。いささか口数は多すぎたが、ころあいを見計らって相手に感想や判断を求める気配りもおおよそ忘れなかった。また驚くほど様々な人の消息に通じてもいた。時間はたちまち過ぎてゆき、夜も更けた。

「たしかに」アリンTONの話は続いた。「いまだこの土地では自分はよそ者ではないかという意識が消えません。すっかりなじんだと思えるだけの根柢は十分あるのですが。それでもお恥ずかしい話、地域の方々についてはよく知らない点もある。たとえばお宅のご一家の場合ですと、サー・ジョン」アリンTONはきちんと敬称つきで相手に呼びかけ、いったん言葉を切った。「地元は何世代も前からお住まいなのでしょうか」

「いやあ、とんでもない」アプルビイは鷹揚に問いかけを打ち消した。この御仁、どういうわけか知らんが、とほけたことを聞くものだと思いつながら。「わたしにとつてもここは別世界です。わたしも浮いた存在なのですよ。ともあれ妻が伯父から今の屋敷を受け継ぎましてね。わたしが警察を退いたのを機に二人で住むようになりました」

「警察を？ ああ、そうでしたね。スコットランドヤード
ロンドン警視庁ですか。わたしもあそこのことはよく知っております」さほど自信ありげな口ぶりでもない。「きつと山ほど現役時代の逸話をお持ちでしょうね。いつか少しご披露いただきたい。いわゆる罪を犯した側にぎりぎりまで迫られたのでしようね。妙な言い方でしょうか。近いうちにこの話題が出るのを楽しみにしております。犯罪学は以前からわたしの大きな興味の対象です。とにかく、田園生活だのなんだのは、どうもね。口癖のようになってはいるのですが、わたしも新参者なのです——言葉の綾だとしてもね」

二本目の葉巻を吸い終わるところだった——二本も吸うつもりはなかったが——アプルビイは、やはり返事を控えた。穏やかな夏の夜、真つ暗な屋敷の外でフクロウがホーホーと鳴いた。いるのは一羽だけらしい。ここに来てから何時間も経つのに初めて鳴き声が聞こえたのだから。アリンTON・パークはさびしい田舎の雰囲気にと合っていた。

アリントン・パーク。この名称からして、オーウエン・アリントンが新参者でないのは明らかだった。直系の祖先であるルパート・アリントンが、チャールズ一世(一六〇〇〜四九。一六二五〜四九にイギリス国王)の宿泊施設としてアリントン城カースルを保有していた。オリヴァー・クロムウェル(一五九九〜一六五八。清教徒革命の指導者)が地所をまず縮小し次いで破壊——徹底的に——した際、理由は不明だが、廃墟となった城と周辺の地所は一族の財産ではなくなった。が、実のところ城郭は、風景のなかでますます目をひく存在たりうる程度には残されていた。ここで採石されたことは一度もないだろう。ひそかに建てた物置小屋ないしは豚小屋のためにおこなつた例はあろうが。また、今アプルビーが招かれているジョージ王朝様式の邸宅が一九世紀初頭に建つて以来、池のすぐ向こうにある朽ちた中世の大建築物はぜひとも保存すべきものとなった。保存してきたのはオズボーン氏だ。

オズボーン氏は羽振りのよい獣脂商人で、裕福であり、郷紳ジェントリーの一員として認められたいという大志を抱いていた。名字ではずいぶん徳をしただろう。というのも、エリザベス一世(一五三三〜一六〇三)の時代あたりから、オズボーンズの価値は認められていたからだ。オズボーン家は近年までアリントン・パークの所有者だった。それをなぜ手放したのか、アプルビーは知らない。まだ付近に暮らす一族の者たちもいる——惨めではないまでも苦しい環境に置かれて。

オーウエン・アリントンに話を戻すと、この男はさりげなく表舞台に現れて屋敷と地所を買い取つた——おかげでジュデイス・アプルビーには、やり方が格好よ過ぎるわね、あのウォーレン・ヘイスティングズ(一七三二〜一八一八。初代インド総督。在任期間は一七七三〜一八五)みたいなと、皮肉まじりの陰口をたたかれる始末だった。ヘイスティングズといえ、故国に戻るなり、インドで築いた資産をもとに先祖代々の地所デイレスフォードをあつさり手に入れた男だ。だがアリントン自身はインド帰りのお大尽ではない。本職は科学者

で、アプルビイの見るところ専門分野では高い地位にあった。ともかく科学のおかげ——いやむしろ、単に科学的精神にもとづく粘り強い証券取引研究のおかげか——で、かなりの財を得たようだ。そうして今に至った——先祖伝来の場所に落ち着き、ちよつとした地主にもなった。人生に成功したイギリス人はこんなふうによく愚者への道を辿るのだと、アプルビイは意地悪く考えた。

「この田舎でのわたしの地位などに関して、まさかうさんくさいとは申せませうまい」何かおもしろがっているかのように、あるいはアプルビイの思考の流れを断ち切るかのように、アリントン は言葉を継いだ。「地元の教会にある墓地を歩いてみればわかりますよ。オズボーン家の場合はね、遺骨の安置所として、極端なほどゴシックふうの地下納骨所ポルトを新築しないといけなかったのです。教会のなかでも、わたしども一族は一般会衆と比べてずっと広い場所を占めています。キリスト教信仰復興運動参加者などと比べてね。それでもわたしはあとから列に割り込んだ人間であり、何代か前の祖先が小作人だったような人々のあいでは新参者なのです。なかなか楽しめる暮らしますが」

「でしような」アプルビイの頭に同国人の妙な階級意識がふと浮かんた。「しかし、娯楽が得られる一方で義務を課されるでしょうな。地所を維持するには相応の手間がかかるに違いない。察するに、あなたはいわば行政官のようなお立場にあつて、ずいぶん人の接待をなさるはずですよ。本業のための時間が削られて惜しくはありませんか？ わたしよりもずっとお若いようだが、少し挑発的な言い方をしてしまったなどアプルビイは感じた。自分を招いてくれた男に対して抱いているのは好意か反感か、自分でも判然としなかつた。

「わたしが辺鄙な土地へ引つ込んだということですか？ かもしれない。ふと気づくと、正直

など何か頭を使うような問題に直面しないものかと、考えている場合もままありましてね」ア
リントンには軽やかに答えた。互いに笑える話をしているだけですよといわんばかりに。「ですが、
田舎の私有地に住む紳士階級の間で、科学の研究に精を出すことは可能なのですよ。わたしの
場合も、ささやかな研究対象からでも大いなる喜びを得ております。わざわざ口にするのも恥ずかし
いほどの話だが、事実です。おわかりでしょうか、あんなつまらんものを設置する活動にも積極的に
関われば、わたしとしては充実感が得られるのです」

「ソーン・エ・リュミエールですか」

「ええ。だがつもうあれは終わった事柄です、幸いにして。もう二度とこの敷地でやらせるつもりはあ
りません。程度の差こそあれ誰もがあれに振り回された。ラセラスも——ふだんは落ち着いているの
に」

ラセラスは金色の毛をしたラブラドル・レトリバー（カナダ原産の
猟犬・盲導犬）で、黒の熊皮の敷物に置かれた
小さな夏用暖炉の前に横たわっていた。毛並みのよい犬だ。短い金糸（スパン・ゴールド）が全身を被っているように
も見える。仕留められた獲物をくわえて戻ってくる生活は過去のものとなり、現在は自分の飼い主と
同じく悠々自適の毎日を送っているようだ。今の格好からすると、心身を休める点では並々ならぬ能
力の持ち主で、満足そうにじっとしているのがお得意らしい。近ごろアリントン邸でおこなわれてい
た催し物のせいで、この犬が神経をいらつかせていたとは信じがたかった。

「催し物はどれぐらい続いたのですか」アプルビーがたずねた。

「三週間。採算が取れる点では最短の実施期間です。ともかく主催者側はわたしにそう持ちかけてき

ました。まあたしかにそうだった。驚くほど手の込んだ代物でしたからね。もちろん役者の手配でまごついたりはありません——音楽や戦闘、砲撃、歴史上の音響全般なども前もって準備してあります。磁気テープに録音してあって、夜毎にそれを思い切り流すだけで収益が出るという次第です」

「やっかいなのはむしろ照明装置ですか」

「ええ、そのとおり。金属線や電線がいたるところにありましてね。ですが本当におもしろい。ほほあらゆる創意が一大見世物へと結集した感じですよ——照明効果それ自体が見世物ですかね。しかし主催者は際限なく工夫をこらしています。すべては一箇所で制御されていますがね。お見せしましょうか」

「入場者の数はどうでしたか」

「連日、満員でした。雨が降った二日間とは別ですが。腰掛け付き花車——このごろはコーチといいますがね——には観光客があふれるほど乗っていました。アトラクションのほとんどはニューヨークとシカゴで調達したものです。こういう準備には、なんと二年近くかかりましたよ。思わぬ難題もいろいろ生まれましてね。たとえば安全対策です。なにしろ入場者は好き勝手にうろつき回りますからね。怪我人が出たらわたしの責任となる。入場者の車が池に突っ込んだり頭に城の資材が落ちたりしたら大変だ。神経を使いましたよ」

「いずれにしろ利益は出たのでしょうか」

「利益？」アリントンは警戒するように相手をちらりと見た。「それはけっこう出たでしょう。しかしわたしのものになるわけではない。地区看護婦（特定地区で病人のいる家庭を訪問する看護婦）やら、自然保護財団やら、第一線を退いた狩猟家やらに配分されるのです。わたしはやれと言われたからやっただけです。動機が不

純だと思いでしょうが、ここが新参者のつらいところです」

「残念だな。わたしもぜひ観たかった」戸外で夜間におこなわれる娯楽など、何ほどのものかと思っていたアプルビイは、そういえば今まで相手にお世辞の一つも口にしなかったなと気づいた。「歴史的事実を次々と思い浮かべせるような場だったでしょうな」

「あの手この手を用いてね」アリンントンはおどけながらも心から満足そうに答えた。「たとえばエリザベス女王がここで一夜を過ごしたことにした。わたしもかなり慎重に演出しましてね——うまくいきました。それからこの現代ふうの屋敷ですが——ふむ、ウインストン・チャーチルがかつて昼食に招かれたらしい。オズボーン家のなかにチャーチルの友人がいたそうです」

「すると城だけでなく屋敷も会場としたのですか」

「交互に——たいていは城を利用しましたが、両方を同時にということは一度もなかった。教会の塔や一二世紀に建てられたハト小屋も使いましたよ。そのほか、敷地からわりに近くに あるものをいくつか。入場料一〇シリング（一シリングは二分の一ポンド。一九七一年、十進法への移行により廃止）の見世物としては悪くないでしょう。ただもつと工夫して無駄な出費を減らせばよかったですと反省しています。この点で我々は厄介な問題を抱え込んでしまったし、今後にも悪い影響が出るかもしれませぬ」アリンントンはいったん言葉を切った。「ちよつと。何か聞こえますか」

アプルビイには何も聞こえなかった。ラセラスにしても、せいぜい息を吐かずにまどろむ技芸アクトの持ち主であるらしい。屋敷の外は晩夏の夜としては異様なほど静かだ。この田園地帯はどんよりした沈黙に包まれているかに思えた。

訳者あとがき

本書はマイケル・イネスによるサー・ジョン・アプルビー物の長篇探偵小説第二〇作、*Appleby at Allington* (Dodd, Mead & Company, 1968. アメリカ版の題名は *Death by Water*) の全訳である。底本には Perennial Library 版を使用した。

スコットランドヤード
ロンドン警視庁の警視総監を務めた(「終わりの終わり」、『アプルビーの事件簿』所収。大久保康雄訳、創元推理文庫、二八八頁参照) のち、退職して今はロンドン近郊で悠々自適の暮らしをしているアプルビーが、自宅からほど近いオーウェン・アrinton 邸に招かれ、当主アrinton と差し向かいでひとときを過ごした。が、そのころ敷地内では身元不明の男が命を落としていた。

また翌日には、同じアrinton 邸で慈善目的の催しが開かれているさなか、当主の縁者がどうも悲運に見舞われたかに思われる。そうしてさらに別の人物もまた……。

いずれの場合も、事件なのか事故なのか、あるいは自殺なのか判然としない。すでに現役ではないアプルビーは、真相究明に動こうにも動きにくい。いや、むしろ思うところあつてなかなか動く気になれないというべきか。しかしながら、ある一件に関して事件説を唱える妻のジュデイスに尻を叩かれたこともあり、ようやく重い腰を上げた。

はたして三件の真相はどういうことなのか。地元警察の本部長との心理的な駆け引きもまじえ、アプルビイは考えを巡らせてゆく。

イネスのアプルビイ物では、重要な登場人物の数が多いことがままたある。第一作『学長の死』（一九三七）からしてアプルビイや警察関係者を除いても二〇名近いし、第二作『ハムレット復讐せよ』（一九三七）では三〇数名にのぼる。第四作『ストップ・プレス』（一九三九）でも後者と似たようなものだ。

その点『アrinton邸の怪事件』では、事件のまわりにいる者たちの数はそこまで多くない。本書の主要人物表には、それでもアプルビイと妻ジュディス以外に一七名を載せたが、実のところ、事件とはとくに関係ないだろうと一見してわかるような顔ぶれも含めた。いずれ劣らぬ、変わっていきやすい「面々」だからだ。それが誰なのかを記すのは、もちろんネタバレにつながりかねないから控えるが、多彩な個性派そのものの内訳を紹介するのはかまうまい。たとえば、妙な副業に励んだ過去を持つらしい元科学者や、言動がとぼけていて常識はずれな聖職者、腹に一物ありそうなお調子者の若き歴史学徒……。当のアrinton一族も、アプルビイとも因縁のある素行不良とおぼしき男や、何かとけたたましい笑い声を上げる女など、おかしな者たちの集まりだ。それだけではない。アrintonの愛犬までもが、実にとほけたいい味を出して、ロンドン近郊の小世界を盛り上げるのに一役買っている（このイヌは本筋でも重要な役を割り振られている）。謎解明の鍵を握る奇人変人が多く出てくる探偵小説といえは、マージェリー・アリングガムの『葬儀屋の次の仕事』（一九四九）を忘れてはなるまい。しかし、イネス作品における多くの例と同じく『アrinton邸の怪事件』を彩る面々は、濃厚

〔著者〕

マイケル・イネス

本名ジョン・イネス・マッキントッシュ・スチュワート。1906年、スコットランド、エディンバラ生まれ。オックスフォード大学を卒業後、リーズ大学で講師として英文学を教え、アドレド大学に赴任後は英文学教授として教鞭を執った。36年、渡豪中の船上で書き上げたという「学長の死」で作家デビュー。46年にオーストラリアより帰国し、クイーンズ大学やオックスフォード大学で教授職を歴任する。94年、死去。

〔訳者〕

井伊順彦（いい・のぶひこ）

早稲田大学大学院博士前期課程（英文学専攻）修了。英文学者。主な訳書に『英国モダニズム短篇集 自分の同類を愛した男』（風濤社、編訳）、『ワシントン・スクエアの謎』（論創社）など。トマス・ハーディ協会、ジョウゼフ・コンラッド協会、バーバラ・ピム協会の各会員。

アリントン^{てい かい じ けん}邸の怪事件

——論創海外ミステリ 218

2018年9月20日 初版第1刷印刷

2018年9月30日 初版第1刷発行

著者 マイケル・イネス

訳者 井伊順彦

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1752-1

落丁・乱丁本はお取り替えいたします